

pemetrexed sodium hydrate (JAN)
ペメトレキセドナトリウム水和物
 代謝拮抗性抗悪性腫瘍剤
 422

【基本電子添文】アリムタ注射用2024年8月改訂

【製品】 規制等：[劇] [処方] 《アリムタ注射用500mg 2007.01.04承認》
 アリムタ *Alimta* 注射用100・500mg (日本イーライリリー)
 ペメトレキセド 点滴静注用100・500mg (高田 日医工岐阜一日医工 ニプロ)
 ペメトレキセド 点滴静注用100・500・800mg (富士製薬)
 ペメトレキセド 点滴静注用100・500・800mg 点滴静注液 100・500・800mg (沢井 日本化薬)
 ペメトレキセド 点滴静注液100・500・800mg (富士フィルム富山化学一東和薬品)
 ペメトレキセド [経] 点滴静注液100・500mg (サンファーマ)

【組成】 ペメトレキセドとして
 [注射用]：1バイアル中108.5mg, 510mg, 816mg。(アリムタ) pH：(25mg/mL生理食塩液) 6.6~7.8 浸透圧比：(1mg/mL, 5mg/mL生理食塩液) 約1
 [注射液] 1バイアル (4mL, 20mL, 32mL) 中100mg, 500mg, 800mg。(日本化薬) pH：7.0~7.8 浸透圧比：約1
 ペメトレキセドナトリウム水和物151.7mg, ペメトレキセドナトリウムヘミペンタ水和物131.1mgはペメトレキセド108.5mgに相当

【効能・効果】 ①悪性胸膜中皮腫 ②切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌 ③扁平上皮癌を除く非小細胞肺癌における術前補助療法

【効能関連注意】 ①効能共通：術後補助療法における本剤の有効性及び安全性は確立していない ②悪性胸膜中皮腫：がん化学療法既治療例における本剤の有効性及び安全性は確立していない ③切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌：扁平上皮癌等の組織型ごとの結果及び化学療法既治療例での結果を熟知し、本剤の有効性及び安全性を十分に理解した上で、患者の選択を行う (臨床成績②③参照) ④扁平上皮癌を除く非小細胞肺癌における術前補助療法：臨床試験に組み入れられた患者の病期等について、臨床成績の項の内容を熟知し、本剤の有効性及び安全性を十分に理解した上で、適応患者の選択を行う (臨床成績③④参照)

【用法・用量】 ペメトレキセドとして ①悪性胸膜中皮腫：シスプラチンとの併用において、1日1回500mg/m² (体表面積) を10分間かけて点滴静注し、少なくとも20日間休薬。これを1コースとし、投与を繰り返す。患者の状態により適宜減量 ②切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌：1日1回500mg/m²を10分間かけて点滴静注し、少なくとも20日間休薬。これを1コースとし、投与を繰り返す。患者の状態により適宜減量 ③扁平上皮癌を除く非小細胞肺癌における術前補助療法 ④〔サンファーマ・高田・富士製薬製造販売品を除く〕他の抗悪性腫瘍剤との併用において、1日1回500mg/m²を10分間かけて点滴静注

し、少なくとも20日間休薬。これを1コースとし、最大4コース投与を繰り返す。患者の状態により適宜減量 ⑤〔サンファーマ・高田・富士製薬製造販売品〕ニボルマブ (遺伝子組換え) 及び白金系抗悪性腫瘍剤との併用において、1日1回500mg/m²を10分間かけて点滴静注し、少なくとも20日間休薬。これを1コースとし、3コースまで投与を繰り返す。患者の状態により適宜減量

【用法関連注意】 ①効能共通 ④本剤による重篤な副作用の発現を軽減するため、次のように葉酸及びビタミンB₁₂を投与する (警告②参照) ⑦葉酸：本剤初回投与の7日以上前から葉酸として1日1回0.5mgを連日経口投与する。なお、本剤を中止又は終了する場合には、本剤最終投与日から22日目まで可能な限り葉酸を投与する ④ビタミンB₁₂：本剤初回投与の少なくとも7日前に、ビタミンB₁₂として1回1mgを筋注する。その後、本剤投与期間中及び中止後22日目まで9週ごと (3コースごと) に1回投与する ⑥欧米の添付文書中には、次表の減量基準の記載がある。減量に関する推奨事項：次のコース開始時の用量調節は、前回の投与コースでの最低血球数又は最大非血液毒性に基づき決定する。回復に十分な時間をかけるために投与を延期してもよい。回復時には、表1, 2, 3のガイドラインに従い再投与を行う。これらは本剤を単剤又はシスプラチンとの併用で使用する場合いずれにも適用する

表1：本剤 (単剤又は併用) 及びシスプラチンの用量調節-血液毒性

	本剤及びシスプラチンの用量 (mg/m ²)
最低好中球数<500/mm ³ 及び最低血小板数≧50,000/mm ³	前回の用量の75%
最低好中球数に関わらず最低血小板数<50,000/mm ³	前回の用量の75%
最低好中球数に関わらず出血を伴う最低血小板数<50,000/mm ³	前回の用量の50%

患者にグレード3以上の非血液毒性が発現した場合には、投与開始前の値以下に回復するまで本剤の投与を控える。投与再開は表2のガイドラインに従う

表2：本剤 (単剤又は併用) 及びシスプラチンの用量調節-非血液毒性※1, ※2

	本剤の用量 (mg/m ²)	シスプラチンの用量 (mg/m ²)
粘膜炎を除くグレード3又は4の毒性	前回の用量の75%	前回の用量の75%
入院を要する下痢 (グレードは問わない) 又はグレード3若しくは4の下痢	前回の用量の75%	前回の用量の75%
グレード3又は4の粘膜炎	前回の用量の50%	前回の用量の100%

※1：米国国立癌研究所共通毒性規準 (CTC)。※2：神経毒性を除く

神経毒性の発現時に推奨される本剤とシスプラチンの用量調節を表3に示す。グレード3又は4の神経毒性が認められた場合には中止する

表3：本剤 (単剤又は併用) 及びシスプラチンの用量調節-神経毒性

CTCグレード	本剤の用量 (mg/m ²)	シスプラチンの用量 (mg/m ²)
0~1	前回の用量の100%	前回の用量の100%

2	前回の用量の100%	前回の用量の50%
---	------------	-----------

2回の減量後にグレード3若しくは4の血液毒性あるいは非血液毒性が認められた場合又はグレード3若しくは4の神経毒性が観察された場合は直ちに本剤を中止する ②悪性胸膜中皮腫 ④シスプラチン以外の抗悪性腫瘍剤との併用における有効性及び安全性は確立していない。なお、シスプラチンは本剤投与30分後に75mg/m²を投与し、投与に際しては、シスプラチンの電子添文に従い腎毒性軽減のための処置等を行う ⑥本剤を単剤で使用した場合の有効性及び安全性は確立していない ③〔サンファーマ・高田・富士製薬製造販売品を除く〕扁平上皮癌を除く非小細胞肺癌における術前補助療法：本剤の投与回数及び併用する他の抗悪性腫瘍剤について、臨床成績の項の内容を熟知し、関連学会の最新のガイドライン等を参考にした上で選択する（臨床成績③a⑥参照）

【警告】 ①本剤を含むがん化学療法に際しては、緊急時に十分対応できる医療施設において、がん化学療法に十分な知識・経験を持つ医師のもとで、本剤が適切と判断される症例についてのみ投与する。適応患者の選択にあたっては、各併用薬剤の電子添文を参照して十分注意する。また、治療開始に先立ち、患者又はその家族に有効性及び危険性を十分説明し、同意を得てから投与する ②本剤による重篤な副作用の発現を軽減するため、必ず葉酸及びビタミンB₁₂の投与のもとに本剤を投与する（用法関連注意①a参照） ③重度の腎機能障害患者で、本剤に起因したと考えられる死亡が報告されているので、重度の腎機能障害患者には投与しないことが望ましい（特定背景関連注意②参照） ④多量の胸水又は腹水が認められる患者では、体腔液の排出を検討する。他の葉酸代謝拮抗剤で、胸水又は腹水等の体腔液の貯留が認められる患者に投与した場合、副作用の増強が報告されている（特定背景関連注意①c参照） ⑤本剤により、間質性肺炎が現れることがあるので、投与に際しては、胸部X線検査等を行うなど観察を十分に行い、間質性肺炎が疑われた場合には、中止し、適切な処置を行う（重要な基本的注意③参照）

【禁忌】 ①本剤の成分に対し重篤な過敏症の既往歴のある患者 ②高度な骨髄抑制のある患者〔骨髄抑制が増悪し、致命的となることがある〕 ③妊婦又は妊娠している可能性のある女性（特定背景関連注意⑤参照）

【重要な基本的注意】 ①発疹が高頻度に起こるので、発疹の発現及び重症化を軽減するため、副腎皮質ホルモン剤の併用投与を考慮する（臨床成績①a～②c参照） ②骨髄抑制等の重篤な副作用が起こることがあるので、投与に際しては臨床症状を十分に観察し、頻回に臨床検査（血液学的検査、肝機能検査、腎機能検査等）を行う。また、本剤の投与にあたっては、G-CSF製剤の適切な使用に関しても考慮する（特定背景関連注意①a、重大な副作用④参照） ③間質性肺炎等の重篤な肺毒性が起こることがあるので、投与にあたっては、臨床症状（呼吸状態、咳及び発熱等の有無）を十分に観察し、定期的に胸部X線検査を行う。また、必要に応じて胸部CT検査、動脈血酸素分圧（PaO₂）、肺泡気動脈血酸素分圧較差（A-aDO₂）、肺拡散能力（DLco）等の検査を行い、患者の状態を十分に観察する（禁忌⑤、特定背景関連注意①b、重大な副作用④参照） ④重度の腎機能障害患者で、本剤に起因したと考えられる死亡が報告されているので、投与前に患者の腎機能を確認する（特定背景関

連注意②参照） **【特定背景関連注意】** ①合併症・既往歴等のある患者 ③骨髄抑制のある患者（重要な基本的注意②参照） ⑥間質性肺炎、肺線維症、又はこれらの疾患の既往歴のある患者（重要な基本的注意③参照） ⑦胸水又は腹水が認められる患者：多量の体腔液が認められる患者では、本剤投与前に体腔液の排出を検討する。胸水、腹水等体腔液の本剤投与への影響は不明であるが、他の葉酸代謝拮抗剤で副作用の増強が報告されている（警告④参照） ⑧腎機能障害患者：本剤は主として腎より排泄される。腎機能障害の程度に応じて本剤の血中濃度の増加が認められている。クレアチニンクリアランスが45mL/min未満の患者は臨床試験では除外されている（警告③参照）。重度の腎機能障害患者（重要な基本的注意④参照） ⑨肝機能障害患者：臨床試験では除外されている ⑩生殖能を有する者 ⑪生殖可能な年齢の患者に投与する必要がある場合には、性腺に対する影響を考慮する。動物実験で雄性生殖器に対する影響（マウス：精子形成能の低下あるいは精細管変性、イヌ：精細管上皮の変性あるいは壊死）が報告されている ⑫妊娠する可能性のある女性には、本剤投与中及び最終投与後6ヵ月間において避妊する必要性及び適切な避妊法について説明する（特定背景関連注意⑤、その他の注意参照） ⑬男性には、本剤投与中及び最終投与後3ヵ月間においてバリア法（コンドーム）を用いて避妊する必要性について説明する（特定背景関連注意⑤、その他の注意参照） ⑭妊婦：妊婦又は妊娠している可能性のある女性には投与しない。動物実験（マウス）で催奇形作用が報告されている（禁忌③、特定背景関連注意④b④c参照） ⑮授乳婦：授乳しないことが望ましい。乳汁中への移行については不明である ⑯小児等：小児等を対象とした臨床試験は実施していない ⑰高齢者：患者の状態を観察しながら慎重に投与する。一般に生理機能が低下していることが多い

【相互作用】 併用注意

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
非ステロイド性抗炎症剤 ・イブプロフェン等	本剤の血中濃度が増加し、副作用が増強するおそれがあるので、併用療法を行う場合には、頻回に臨床検査を行うなど患者の状態を十分に観察する	他の葉酸代謝拮抗剤で副作用の増強が知られており、本剤においてもクリアランスの低下が認められている
腎毒性を有する薬剤又は腎排泄型薬剤 ・プロベネシド ・ペニシリン等	本剤の血中濃度が増加し、副作用が増強するおそれがあるので、併用療法を行う場合には、慎重に投与する	他の葉酸代謝拮抗剤で腎排泄を競合的に阻害することが知られており、本剤のクリアランスを遅延させるおそれがある
抗悪性腫瘍剤	骨髄機能抑制等の副作用が増強するおそれがあるので、併用療法を行う場合には、患者の状態を十分に観察する	ともに骨髄機能抑制作用を有する

【副作用】 次の副作用が現れることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には中止するなど適切な処置を行う

①重大な副作用 ①a**骨髄抑制**：白血球減少（71.6%）、好中球減少（64.4%）、ヘモグロビン減少（54.2%）、リンパ球減少（51.1%）、血小板減少（46.2%）、貧血（頻度不明）、発熱性好中球減少（頻度不明）、汎血球減少症（頻度不明）が現れることがある（重要な基本的注意②参照） ①b**感染症**：敗血症（頻度不明）、肺炎（頻度不明）等の重篤な感染症が現れることがある ①c**間質性肺炎**（3.6%）：肺毒性の発症あるいは急性

増悪が疑われた場合には、直ちに本剤による治療を中止し、ステロイド治療等の適切な処置を行う（重要な基本的注意③参照）④**ショック**（頻度不明）、**アナフィラキシー**（頻度不明）：呼吸困難、喘鳴、血圧低下、発疹、発赤、痒疹感等の異常が認められた場合には中止し、適切な処置を行う ⑤**重度の下痢**（1.3%）⑥**脱水**（1.3%）：異常が認められた場合には、減量、休薬、補液、電解質投与等適切な処置を行う ⑧**腎不全**：クレアチニン上昇（7.1%）、腎不全（頻度不明）、クレアチニンクリアランス低下（頻度不明）が現れることがある ⑨**中毒性表皮壊死融解症（Toxic Epidermal Necrolysis：TEN）**（頻度不明）、**皮膚粘膜眼症候群（Stevens-Johnson症候群）**（頻度不明）

②その他の副作用

副作用分類	20%以上	5～20%未満	5%未満	頻度不明
内分泌系		血糖値上昇	尿糖陽性	
精神神経系		頭痛、めまい、感覚神経障害	味覚異常、感覚鈍麻、不眠症、傾眠、運動神経障害	
眼			眼脂、流涙増加、眼球乾燥、結膜炎	
循環器			血圧上昇、心嚢液貯留、動悸、不整脈	
血管障害		ほてり	潮紅	
呼吸器			しゃっくり、咳嗽、咽喉頭疼痛、鼻漏、呼吸困難、胸水、低酸素症	
消化器	食欲不振、悪心、嘔吐	便秘、下痢、口内炎・咽頭粘膜炎、消化不良	口唇炎、胃部不快感、腹痛、胃炎、食道炎	大腸炎
肝臓	AST上昇、ALT上昇、血中LDH上昇、血中AI-P上昇	ビリルビン上昇、 γ -GTP上昇	尿中ウロビリリン陽性	
皮膚	発疹	痒疹症	色素沈着、脱毛症、多形紅斑、蕁麻疹	
腎臓		アルブミン低下、電解質異常、尿潜血陽性、蛋白尿、総蛋白減少、BUN上昇	総蛋白増加	
その他	倦怠感、発熱、CRP上昇	疲労、体重減少、熱感、白血球増多、好中球増多、血小板増多、浮腫	関節痛、感冒様症状、顔面浮腫、眼瞼浮腫、悪寒、鼻出血、肺炎、単球増多、胸痛、アレルギー反応/過敏症	放射線照射リコール反応、溶血性貧血

【過量投与】①**症状**：主な症状は、骨髄抑制（好中球減少、血小板減少、貧血）、粘膜炎及び発疹である。また、感染及び下痢が現れることがある ②**処置**：症状に応じた支持療法を行う 他、ホリナートカルシウムによる処置を検討する 【**適用上の注意**】①**薬剤調製時の注意** ③**細胞毒性を有するため、調製時には手袋を着用することが望ましい**。皮膚に薬液が付着した場

合は直ちに石ケンでよく洗浄し、粘膜に付着した場合は直ちに多量の流水でよく洗い流す ⑥本剤の溶解及び希釈には生理食塩液のみを使用する。カルシウムを含有する溶液との混合により濁り又は沈殿が確認されているので、乳酸リンゲル液及びリンゲル液等との配合を避ける。また、他剤との混注を行わない ⑦〔注射用〕1バイアルに生理食塩液を、100mg製剤の場合4.2mL、500mg製剤の場合20mL、800mg製剤の場合32mLを注入して十分に溶解する。溶解後のペメトレキセド濃度は25mg/mL（実測値）である。投与量に応じて必要量の溶解液を抜き取り、生理食塩液に混和して100mLとして用いる ⑧〔注射用〕溶解後は速やかに投与する。保存する場合は冷蔵（2～8℃）にて保存し、24時間以内に使用する。溶解した残液は使用しない ⑨〔注射用〕投与量に応じて必要量を抜き取り、生理食塩液に混和して100mLとして用いる ⑩**薬剤投与時の注意**：必ず点滴静注とし、皮下注、筋注しない 【**その他の注意**】非臨床試験に基づく情報：遺伝毒性試験のうち、マウス小核試験において、陽性の結果が報告されている（特定背景関連注意④⑤⑥参照） 【**取扱い上の注意**】〔注射液〕①製品の安定性を保持するため脱酸素剤を封入しているため、外包装は使用前まで開封しない。開封後は速やかに使用する ②外包装開封前に、酸素検知剤が変色している場合は使用しない 【**保存等**】室温保存。有効期間：3年

【**薬物動態**】（※：承認1回用量は500mg/m²）①**血中濃度** 血漿中濃度：各種悪性腫瘍患者31例に300～1,200mg/m²※の用量範囲で21日ごとに10分間点滴静注。血漿中濃度は点滴終了直後が最も高く、その後速やかに消失し、消失半減期は2.74時間（範囲：2.28～3.62時間）。このときの血漿クリアランスは61.4～109mL/min、定常状態分布容積は10.6～14.8L。第1コース及び第2コース間で血漿中濃度に差は認められなかった ②**分布** ③**組織分布**（参考）：マウスに¹⁴C-標識体20mg/kgを単回静注時、肺等の広範な臓器・組織に速やかに分布。投与1時間後には、尿、胆嚢内胆汁、糞、腸内容物、腎臓及び肝臓に比較的高い放射活性が検出され、投与後速やかに尿中及び胆汁中に排泄されることを示唆 ④**蛋白結合率**：ヒト蛋白結合率は約81%。また、腎機能障害による影響をほとんど受けなかった（*in vitro*） ⑤**代謝**：主として尿中へ未変化体として排泄されることから、代謝をほとんど受けないと推察 ⑥**排泄**：各種悪性腫瘍患者31例に300～1,200mg/m²※の用量範囲で21日ごとに10分間点滴静注後24時間以内に、その大部分が主に尿中へ未変化体として排泄され、投与後72時間までの累積尿中未変化体排泄率は75.2%（64.5～82.7%） ⑦**特定の背景を有する患者** 腎機能障害患者：日本人患者31例と外国人患者412例の統合解析により、薬物動態に与える腎機能の影響を評価。日本人の腎機能低下患者（クレアチニンクリアランス45mL/min）に500mg/m²を投与時、腎機能が正常な患者（クレアチニンクリアランス90mL/min）に比較して、血漿クリアランスが32%低く、血漿中濃度時間曲線下面積（AUC）が48%増大すると予測 ⑧**薬物相互作用**：葉酸とビタミンB₁₂の併用は、本剤単剤投与時、あるいはシスプラチン併用投与時とも本剤の血漿クリアランスに影響を与えない。また、本剤とシスプラチンは互いの薬物動態に影響を及ぼさない（外国人データ） 【**臨床成績**】有効性及び安全性に関する試験〔*：発疹の発現及び重症化を軽減するため、外国臨床試験では、本剤投与の前日から投与の翌日までの3日間、デキサメタゾンを1回4mg、1日2回経口投与。また、国

内臨床試験では、発疹が発現した症例に限り、次回の本剤投与時から外国臨床試験の用法・用量を参考にデキサメタゾン等の副腎皮質ホルモン剤の投与を可能とした（重要な基本的注意①参照）

①悪性胸膜中皮腫 ②国内第I/II相試験 ③悪性胸膜中皮腫患者を対象に国内で実施した併用投与第I/II相試験*で、本剤500mg/m²及びシスプラチン75mg/m²を投与された症例の奏効率は36.8%（19例中PR7例）

④本治療との因果関係を否定できない死亡例が全投与症例25例中1例に認められた。安全性評価対象25例中に認められた主な副作用は、悪心（96.0%）、ヘモグロビン減少（96.0%）、食欲不振（88.0%）、好中球減少（84.0%）、赤血球減少（84.0%）、白血球減少（80.0%）、嘔吐（72.0%）、リンパ球減少（64.0%）、倦怠感（56.0%）、血中尿素増加（52.0%）（重要な基本的注意①参照）

⑤化学療法未治療患者を対象とした外国第III相試験：悪性胸膜中皮腫患者（化学療法未治療）を対象に米国ほか20カ国で実施された第III相試験*における、本剤500mg/m²及びシスプラチン75mg/m²併用群及びシスプラチン75mg/m²単独群（未承認）

*¹の成績は、次のとおり。なお、本試験は優越性を検証することを主要目的として実施

⑦生存期間中央値は、本剤及びシスプラチン併用群（226例^{※2}）12.1月、シスプラチン単独群^{※1}（222例^{※2}）9.3月、p値=0.020^{※3}。

*¹：21日を1コースとして第1日目に、シスプラチン75mg/m²を投与。^{※2}：薬剤を投与された症例（葉酸、ビタミンB₁₂の併用なし症例を含む）。^{※3}：ログランク検定（優越性に関する検定）

④本剤とシスプラチンの併用群において、本治療との因果関係を否定できない死亡例が全投与症例226例中3例に認められ、いずれも葉酸及びビタミンB₁₂が併用投与されていない症例。安全性評価対象168例（葉酸及びビタミンB₁₂併用群）中に認められた主な副作用は、悪心（82.1%）、嘔吐（56.5%）、好中球減少（56.0%）、白血球減少（53.0%）、疲労（47.6%）、ヘモグロビン減少（26.2%）、血小板減少（23.2%）、口内炎（23.2%）、食欲不振（20.2%）（重要な基本的注意①参照）

②切除不能な進行・再発の非小細胞肺癌 ③化学療法既治療患者を対象とした国内第II相試験 ④非小細胞肺癌患者（化学療法既治療）を対象に国内で実施した第II相試験*で、本剤500mg/m²を投与された症例の奏効率は18.5%（108例中PR20例）

④本剤〔500mg/m²又は1,000mg/m²（承認1回用量は500mg/m²）投与〕との因果関係を否定できない死亡例が全投与症例226例中1例に認められた。安全性評価対象225例中に認められた主な副作用は、AST上昇（76.9%）、発疹（73.8%）、白血球減少（71.6%）、ALT上昇（71.6%）、好中球減少（64.4%）、食欲不振（56.9%）、ヘモグロビン減少（54.2%）、悪心（53.8%）、LDH上昇（52.0%）、リンパ球減少（51.1%）（重要な基本的注意①参照）

⑤化学療法未治療患者を対象とした外国第III相試験：非小細胞肺癌患者（化学療法未治療）を対象に米国ほか26カ国で実施された第III相試験*における、本剤500mg/m²及びシスプラチン75mg/m²併用群（AC群）とゲムシタビン1,250mg/m²及びシスプラチン75mg/m²併用群（GC群）の成績は、次のとおり。なお、本試験は非劣性を検証することを主要目的として実施

⑦生存期間中央値（95%信頼区間）は、AC群^{※1}（862例^{※3}）10.3月（9.8-11.2）、GC群^{※2}（863例^{※3}）10.3月（9.6-10.9）、ハザード比（95%信頼区間）0.94（0.84-1.05）^{※4}、p値<0.0001^{※5}。

*¹：21日を1コースとして第1日目に、本剤500mg/m²及びシス

プラチン75mg/m²を投与。^{※2}：21日を1コースとして第1日目、8日目に、ゲムシタビン1,250mg/m²及び第1日目にシスプラチン75mg/m²を投与。^{※3}：すべての無作為割付された症例。^{※4}：共変量としてECOG PS、性、病期、病理学的診断方法を用い調整したハザード比。^{※5}：ワルド検定（非劣性に関する検定）。リスク集団（at risk数）は生存期間別（AC群、GC群の順）に、0月（862、863）、6月（598、590）、12月（341、327）、18月（146、139）、24月（45、34）、30月（0、0）

④本試験における組織型別の部分集団解析の結果を次表に示す

組織型別 部分集団	AC群 生存期間中央値 (95%信頼区間)	GC群 生存期間中央値 (95%信頼区間)	ハザード比 ^{※1} 、 ※2 (95%信頼区 間)
扁平上皮癌〔473 例〕	9.4月 (8.4-10.2) 〔244例〕	10.8月 (9.5-12.1) 〔229例〕	1.23 (1.00- 1.51)
腺癌 〔847例〕	12.6月 (10.7- 13.6) 〔436例〕	10.9月 (10.2- 11.9) 〔411例〕	0.84 (0.71- 0.99)
大細胞癌 〔153例〕	10.4月 (8.6-14.1) 〔76例〕	6.7月 (5.5-9.0) 〔77例〕	0.67 (0.48- 0.96)
その他 ^{※3} 〔252例〕	8.6月 (6.8-10.2) 〔106例〕	9.2月 (8.1-10.6) 〔146例〕	1.08 (0.81- 1.45)

*¹：ハザード比が1を下回る場合はAC群がGC群に比較して生存期間が長いことを示す。^{※2}：共変量としてECOG PS、性、病期、病理学的診断方法を用い調整したハザード比。^{※3}：その他は、一次診断が扁平上皮癌、腺癌及び大細胞癌のいずれに分類されるのか明らかでなかった症例等を含む

リスク集団（at risk数）は生存期間別（AC群、GC群の順）に、扁平上皮癌：0月（244、229）、6月（161、155）、12月（77、87）、18月（28、38）、24月（8、8）、30月（0、0）。腺癌：0月（436、411）、6月（318、292）、12月（205、167）、18月（98、70）、24月（35、20）、30月（0、0）。大細胞癌：0月（76、77）、6月（51、42）、12月（30、21）、18月（11、10）、24月（1、1）、30月（0、0）。その他：0月（106、146）、6月（68、101）、12月（29、52）、18月（9、21）、24月（1、5）、30月（0、0）

⑦AC群839例において、本治療との因果関係を否定できない有害事象は、悪心（56.1%）、嘔吐（39.7%）、ヘモグロビン減少（33.0%）、疲労（42.7%）、好中球減少症（29.0%）（重要な基本的注意①参照）

③化学療法既治療患者を対象とした外国第III相試験：非小細胞肺癌患者（化学療法既治療）を対象に米国ほか23カ国で実施された第III相試験*における、本剤500mg/m²群及びドセタキセル75mg/m²群^{※1}の成績は次のとおり。なお、本試験は非劣性を検証することを主要目的として実施

⑦生存期間中央値（95%信頼区間）は、本剤群（283例^{※2}）8.3月（7.0-9.4）、ドセタキセル群^{※1}（288例^{※2}）7.9月（6.3-9.2）、ハザード比（95%信頼区間）0.99（0.82-1.20）、p値=0.251^{※3}。

*¹：21日を1コースとして第1日目に、ドセタキセル75mg/m²を投与。^{※2}：すべての無作為割付された症例。^{※3}：ワルド検定（非劣性に関する検定）。リスク集団（at risk数）は生存期間別（本剤群、ドセタキセル群の順）に、0月（283、288）、6月（174、158）、12月（51、50）、18月（2、4）、24月（0、0）

④本試験における組織型別の部分集団解析の結果を次表に示す

組織型別 部分集団	本剤群 生存期間中央値 (95%信頼区間)	ドセタキセル群 生存期間中央値 (95%信頼区間)	ハザード比 ^{※1} 、 ※2

			(95%信頼区 間)
扁平上皮癌〔172 例〕	6.2月 (4.9-8.0) 〔78例〕	7.4月 (5.6-9.5) 〔94例〕	1.56 (1.08- 2.26)
腺癌 〔301例〕	9.0月 (7.6-9.6) 〔158例〕	9.2月 (7.5-11.3) 〔143例〕	0.92 (0.69- 1.22)
大細胞癌〔47例〕	12.8月 (5.8-14.0) 〔18例〕	4.5月 (2.3-9.1) 〔29例〕	0.27 (0.11- 0.63)
その他※3 〔51例〕	9.4月 (6.0-10.1) 〔29例〕	7.9月 (4.0-8.9) 〔22例〕	0.57 (0.27- 1.20)

※1：ハザード比が1を下回る場合は本剤群がドセタキセル群に比較して生存期間が長いことを示す。※2：共変量としてECOG PS, 前化学療法からの期間, 性, 病期を用い調整したハザード比。※3：その他は, 一次診断が扁平上皮癌, 腺癌及び大細胞癌のいずれに分類されるのか明らかでなかった症例等を含むリスク集団 (at risk数) は生存期間別 (本剤群, ドセタキセル群の順) に, 扁平上皮癌: 0月 (78, 94), 6月 (39, 49), 12月 (6, 17), 18月 (0, 1), 24月 (0, 0)。腺癌: 0月 (158, 143), 6月 (103, 88), 12月 (34, 29), 18月 (0, 3), 24月 (0, 0)。大細胞癌: 0月 (18, 29), 6月 (12, 10), 12月 (7, 3), 18月 (1, 0), 24月 (0, 0)。その他: 0月 (29, 22), 6月 (20, 11), 12月 (4, 1), 18月 (1, 0), 24月 (0, 0) ㊦本剤単独群において, 本治療との因果関係を否定できない死亡例が全投与症例265例中3例に認められた。安全性評価対象265例中に認められた主な副作用は, 疲労 (34.0%), 悪心 (30.9%), 食欲不振 (21.9%) (効能関連注意③, 重要な基本的注意①参照) ③扁平上皮癌を除く非小細胞肺癌における術前補助療法 ㉓国際共同第Ⅲ相試験 (ONO-4538-55/CA209816試験) : 臨床病期 I B (腫瘍径が4cm以上), II 又は IIIA の非小細胞肺癌の術前患者※1 358例 (日本人患者68例を含む。ニボルマブ (遺伝子組換え) と白金系抗悪性腫瘍剤を含む化学療法併用 (N+C併用) ※2 群179例, 白金系抗悪性腫瘍剤を含む化学療法群179例) を対象に, 化学療法を対照として, N+C併用の有効性及び安全性を検討 ㉔主要評価項目の一つである無イベント生存期間 (中央値 [95%信頼区間]) は, N+C併用群で31.57 [30.16~推定不能] ヶ月, 化学療法群で20.80 [14.03~26.71] ヶ月であり, N+C併用投与は化学療法に対し統計学的に有意に延長 (ハザード比0.63 [97.38%信頼区間: 0.43~0.91], p=0.0052 [層別log-rank検定], 2021年9月8日データカットオフ)。at risk数は無イベント生存期間別 (化学療法併用群, 化学療法群の順) に, 0月 (179, 179), 3月 (151, 144), 6月 (136, 126), 9月 (124, 109), 12月 (118, 94), 15月 (107, 83), 18月 (102, 75), 21月 (87, 61), 24月 (74, 52), 27月 (41, 26), 30月 (34, 24), 33月 (13, 13), 36月 (6, 11), 39月 (3, 4), 42月 (0, 0) ㉕ニボルマブ (遺伝子組換え), ペメトレキセド及びシスプラチン※2が併用投与された患者における安全性評価対象83例中61例 (73.5%) に副作用が認められた。主な副作用は, 悪心30例 (36.1%), 便秘21例 (25.3%), 食欲減退15例 (18.1%), 倦怠感10例 (12.0%), 発疹10例 (12.0%), 好中球減少症9例 (10.8%), 無力症9例 (10.8%) (2022年9月6日データカットオフ) (効能関連注意④, 用法関連注意③参照)。※1: 臨床病期はAmerican Joint Committee on Cancer (AJCC) /Union for International Cancer Control (UICC) 病期分類 (第7版) に基づく。EGFR遺伝子変異陽性又はALK融合遺伝子陽性であることが確認されている患者は対象外とされた。※2: 扁平上皮癌に対しては, ニボルマブ

(遺伝子組換え) 1回360mg, ゲムシタビン1回1,000若しくは1,250mg/m², シスプラチン1回75mg/m²を3週間間隔で最大3サイクル点滴静注, 又はニボルマブ (遺伝子組換え) 1回360mg, パクリタキセル1回175若しくは200mg/m², カルボプラチン1回AUC5若しくは6 (mg/mL・min) を3週間間隔で最大3サイクル点滴静注。ゲムシタビンは各サイクル1日目及び8日目に点滴静注。非扁平上皮癌に対しては, ニボルマブ (遺伝子組換え) 1回360mg, ペメトレキセド1回500mg/m², シスプラチン1回75mg/m²を3週間間隔で最大3サイクル点滴静注, 又はニボルマブ (遺伝子組換え) 1回360mg, パクリタキセル1回175若しくは200mg/m², カルボプラチン1回AUC5若しくは6 (mg/mL・min) を3週間間隔で最大3サイクル点滴静注。シスプラチンに対する忍容性がないと判断された場合には, シスプラチンをカルボプラチン1回AUC5若しくは6 (mg/mL・min) に変更可能。併用投与時においては, ニボルマブ (遺伝子組換え) を最初に投与し, 化学療法はニボルマブ (遺伝子組換え) の投与終了から約30分の間隔をおいて投与を開始 ㉖国際共同第Ⅲ相試験 (KEYNOTE-671試験) : 臨床病期 II 期, IIIA 期又は IIIB 期の周術期の非小細胞肺癌患者#797例 (日本人82例を含む) を対象に, 術前補助療法としてのペムプロリズマブと化学療法との併用療法, 及び術後補助療法としてのペムプロリズマブ単独療法※1の有効性及び安全性を, 術前補助療法としてのプラセボと化学療法との併用療法, 及び術後補助療法としてのプラセボ投与※2を対照とした二重盲検試験で検討。#: 臨床病期はAJCC/UICC病期分類 (第8版) に基づく。なお, IIIB 期は T3N2M0, T4N2M0 に該当する患者が対象とされた。EGFR遺伝子変異陽性又はALK融合遺伝子陽性の患者を含む ㉗主要評価項目は全生存期間 (OS) 及び無イベント生存期間 (EFS) とされ, 術前補助療法としてのペムプロリズマブと化学療法との併用療法, 及び術後補助療法としてのペムプロリズマブ単独療法は, 術前補助療法としてのプラセボと化学療法との併用療法, 及び術後補助療法としてのプラセボ投与と比較してOS及びEFSを有意に延長 (1)OS (中間解析時のデータ: 2023年7月10日カットオフ) の中央値 (95%信頼区間) は, ペムプロリズマブと化学療法との併用療法/ペムプロリズマブ群※1 (397例) NE (NE, NE) (NE: Not Estimated), プラセボと化学療法との併用療法/プラセボ群※2 (400例) 52.4月 (45.7, NE), ハザード比※3 (95%信頼区間) 0.72 (0.56, 0.93), p値※4<0.00517。at risk数は生存期間別 (ペムプロリズマブと化学療法との併用療法/ペムプロリズマブ群, プラセボと化学療法との併用療法/プラセボ群の順) に, 0月 (397, 400), 6月 (371, 379), 12月 (347, 347), 18月 (327, 319), 24月 (277, 256), 30月 (205, 176), 36月 (148, 125), 42月 (108, 77), 48月 (69, 39), 54月 (32, 20), 60月 (4, 4), 66月 (0, 0) (2)EFS [中間解析時のデータ: 2022年7月29日カットオフ (EFSは治験担当医師による評価)] の中央値 (95%信頼区間) は, ペムプロリズマブと化学療法との併用療法/ペムプロリズマブ群※1 (397例) NE (34.1, NE), プラセボと化学療法との併用療法/プラセボ群※2 (400例) 17.0月 (14.3, 22.0), ハザード比※3 (95%信頼区間) 0.58 (0.46, 0.72), p値※4<0.00001。at risk数は無イベント生存期間別 (ペムプロリズマブと化学療法との併用療法/ペムプロリズマブ群, プラセボと化学療法との併用療法/プラセボ群の順) に, 0月 (397, 400), 6月 (330, 294), 12月 (236, 183), 18月 (172, 124), 24月

(117, 74), 30月 (72, 38), 36月 (42, 24), 42月 (11, 9), 48月 (0, 1), 54月 (0, 0)。※¹: 術前補助療法としてペムプロリズマブ200mg 3週間間隔投与 (Q3W) (各コースの1日目に投与) と次の化学療法を最大4コース併用し, 術後補助療法としてペムプロリズマブ200mg Q3W (各コースの1日目に投与) を13コース投与 [扁平上皮非小細胞肺癌: ゲムシタビン 1,000mg/m² (1コース21日間, 各コースの1, 8日目に投与), シスプラチン75mg/m² (1コース21日間, 各コースの1日目に投与) を投与。非扁平上皮非小細胞肺癌: ペメトレキセド 500mg/m², シスプラチン75mg/m²をQ3Wで各コースの1日目に投与]。※²: 術前補助療法としてプラセボQ3W (各コースの1日目に投与) と※¹と同一の化学療法を最大4コース併用し, 術後補助療法としてプラセボQ3W (各コースの1日目に投与) を13コース投与。※³: 層別Cox比例ハザードモデルによるプラセボと化学療法との併用療法/プラセボとの比較。※⁴: 層別ログランク検定 ④ペムプロリズマブ, ペメトレキセド及びシスプラチンが併用投与された患者における安全性解析対象例222例中216例 (97.3%) (日本人22例中22例を含む) に副作用が認められた。主な副作用は, 悪心127例 (57.2%), 好中球数減少87例 (39.2%), 疲労66例 (29.7%), 貧血63例 (28.4%), 便秘63例 (28.4%), 白血球数減少58例 (26.1%) 及び食欲減退54例 (24.3%) (2023年7月10日データカットオフ) (効能関連注意

④, 用法関連注意③参照) 【薬効薬理】 ①作用機序: ペメトレキセドは, 複数の葉酸代謝酵素を同時に阻害することによりDNA合成を阻害して抗腫瘍効果を発揮。本剤は細胞内に取り込まれた後にポリグルタミン酸化を受け, チミジル酸シンターゼ (TS), ジヒドロ葉酸レダクターゼ (DHFR), グリシンアミドリボスクレオチドホルミルトランスフェラーゼ (GARFT)などを阻害 ②抗腫瘍効果 ③*in vitro*試験: 本剤はヒト中皮腫細胞に対して抗腫瘍活性を示し, 更にシスプラチンとの併用で抗腫瘍効果が増強。また, 各種ヒト由来非小細胞肺癌株 (細気管支肺胞上皮癌, 腺癌, 大細胞肺癌, 扁平上皮癌) に対しても濃度に依存して腫瘍増殖抑制作用を示した ④*in vivo*試験: 本剤は, 腹側皮下にヒト由来非小細胞肺癌 (H2122腺癌) を移植した異所移植ヌードマウスの腫瘍増殖を有意に抑制。また, 同細胞株を左肺に移植した同所移植ヌードラットで延命作用を示した

【性状】 ペメトレキセドナトリウム水和物は白色の粉末又は塊である。水に溶けやすく, メタノールにやや溶けやすく, エタノール (99.5) に極めて溶けにくい

ペメトレキセドナトリウムヘミペンタ水和物pemetrexed sodium hemipentahydrate (JAN) は白色の粉末又は塊を含む粉末である。水に溶けやすく, メタノールにやや溶けやすく, エタノール (99.5) にほとんど溶けない